

# 言葉を理解できない大学生が増加、 今の教育では対処できない理由

榎本博明:心理学博士、MP人間科学研究所代表

2020.7.13 4:40



学生の読解力が低下しているのは教育に問題がある(写真はイメージです) Photo:PIXTA

今、教育の現場では、あらゆる学習において、社会に出てからの実用性を重視する実学志向が強まっている。だが、基礎知識や教養、物事を深く考える習慣を身につけさせないのであれば、先の読めない変化の激しい時代を柔軟に生きることは困難だ。[『教育現場は困ってる——薄っぺらな大人をつくる実学志向』](#)(平凡社新書)の著者・榎本博明氏は、学校教育の在り方に警鐘を鳴らす。

## 英語の学力低下は、偏差値にして 7.4

いくら知識を詰め込んでも、現実生活に応用できなければ意味がないことから、知識偏重の教育からの脱却が唱えられ、さまざまな教育改革が行われてきた。2022年度からは、高校の国語の授業で生徒会の規約や自治体の広報、駐車場の契約書など実用文の読み方を学ばせるなど、実学志向は今後もっと強まりそうだ。

実用性重視の教育にかじを切ったきっかけのひとつが、会話重視の英語の授業だった。1993年以降、英語教育を読解・文法中心から会話中心に転換してきたのだ。その結果、何が起きているか。榎本氏は読解力や教養を身に付けられていないと指摘する。

公立高校の入試問題について、20万人のデータをもとに、英語の学力の経年変化を検討した心理学者の斉田智里氏によれば、1995年から2008年の14年間、毎年一貫して英語の学力が低下していることが判明したという。学力の低下の程度は、偏差値にすると7.4という衝撃的な数字だ。たとえば、2008年の偏差値50は、1995年の偏差値42.6に相当することになる。

こうした英語の学力低下のため、大学でも従来のような英語の文献を用いたゼミが成り立たないといった事態さえ生じている。日常会話はできても文章の読解ができないのだ。

かつてのような英文の読解が中心の授業であれば、英語で書かれた小説や評論を読み、それを日本語に訳すことで、言語能力や想像力が鍛えられるだけでなく、教養あふれる文章に触れることで深い教養が身につく、視野も広がり、知的刺激を十分に受けることができた。

ところが、英語の授業が会話中心の実用的な内容になったことで、海外からの旅行者に道案内したり、外国人とあいさつなどちょっとした日常会話を交わしたりする訓練となり、英文解釈のような知的格闘もなく、読解力の向上も深い教養の獲得も期待できなくなった。英語圏では幼い子どもが行っている程度の会話の訓練、つまり知的発達とは無縁の訓練を、日本では中学や高校ばかりでなく大学の授業時間内に行うようになったのである。

## 英会話教育の大きな勘違い

ある大学生が、ネイティブ教員が行う英語の授業について、榎本氏に文句を言ってきたことがあったという。

大学の英語の授業で使っているテキストが、妹が中学で英語の補助教材として使っている日常会話の本と同じで、「恥ずかしくて妹に知られないように隠している」「大学でこんな授業を受けるとは思わなかった」「ネイティブが、笑顔で話しかけ名前を呼んでくれたって喜んでる友だちもいるけど、もっと知的な授業を受けたい」というのだ。

中学・高校・大学で英語の授業を受けても、全然しゃべれるようにならないから従来の授業は役に立たない、実用英会話にシフトすべきだとして、英語教育の大転換が行われたわけだが、そこに大きな勘違いがあったと言わなければならない。学校の授業というのは、単に実用のために受けるものではなく、頭の鍛錬、知的発達の促進のために受けるものなのである。そこを見逃しているのだ。それには日本人の欧米コンプレックス、白人コンプレックスも絡んでいるのだろう。

英語を日本語に翻訳するというのが従来の英語の授業だったが、それは国語力と英語力を駆使した知的格闘技のようなものであり、知的刺激にあふれるものだった。

英文学者の行方昭夫氏は、翻訳について、次のように述べている。

“I like dogs.”をドイツ語・フランス語にする場合、構文はまったく変わらず単語を置き換えるだけです。しかし日本の翻訳者は、「わたくし、犬が好きでございます」から「可愛がるなら犬だな」まで、前後関係、状況しだいで、無限の種類の日本文があります。訳者はその中からもっとも適切な一つを選ばねばなりません(行方昭夫『英会話不要論』文春新書)。

まさに翻訳というのは、言語能力や知識を総動員し、想像力を働かせて行う知的格闘技なのである。

## こんな教育ではAI時代は生き残れない

外国人との会話に直接使える言い回しや発音のハウツーを習い、リスニングの訓練をするばかりでは、英語で書かれた文学や評論を日本語に訳すときのような知的鍛錬にならず、知的発達が滞ってしまう。

そんなことを授業でやっていたら、すでに研究データを紹介したように英語の学力低下をもたらすばかりでなく、私たち日本人にとっての思考の道具である国語力も向上せず、思考力は磨かれない。この先、AIの通訳機能の発達により、だれもが母国語で外国人とコミュニケーションできる時代になったら、薄っぺらい英会話教育に力を入れて育った人間に、果たして生きる道はあるのだろうか。

それにもかかわらず、小学校から英会話中心の英語の授業が行われるようになり、子どもたちは学校の授業だけでなく塾にまで通って、貴重な勉強時間を英会話の訓練に費やす方向に歩み出している。

たとえ現場の教員も、子どもたちの保護者も、今の教育が知的発達を阻害するとわかっていても、歩みを止められない。なぜなら、今後、ますます大学入試で英会話力

を問う方向になっていくため、英会話力を高めるために時間、労力、金を費やすしかないのだ。

## 設問文の意味すらわからない

さらに榎本氏は学生の読書傾向のデータをあげながら、危機的現状について警鐘を鳴らす。全国大学生生活協同組合連合会が、毎年全国の国公私立 30 大学の学生を対象に実施している学生生活実態調査によれば、読書しない学生の比率がこのところ急激に高まっているという。

1 日の読書時間が 0(ゼロ)という学生の比率は、2012 年までは 30%台半ばで推移していたが、2013 年以降高まり続け、ついに 2017 年には 53.1%と過半数に達した。2019 年は 48.1%と多少低下したものの、相変わらず半数ほどの学生が読書時間 0(ゼロ)となっている。もちろん今でも読書に熱心な学生もいて、26.8%の学生が 1 日 1 時間以上は読書にあてている。

つまり、毎日 1 時間以上読書している学生が 4 分の 1 ほどいるものの、読書はまったくしないという学生が半数ほどいることになる。大学生なのに読書時間 0(ゼロ)という学生が半数もいるとしたら、これは知識偏重というより知識軽視の教育が行われているというべきなのではないか。

実際、榎本氏の研究領域では、従来当たり前のように行っていた心理検査やアンケート調査のできない学生が増えている。設問文の意味がわからないのだ。榎本氏自身、そのような質問をされて驚くことが少なくない、という。

たとえば、「内向的って何ですか？」「事なかれ主義ってどういう意味ですか？」「引っ込み思案って、どういう意味ですか？」「気分が不安定って、どういうことですか？」「むなしいって何ですか？」などといった質問が出る。

少し前なら学生たちが普通に使っていた言葉が通じなくなっている。そうすると、本を読んでも内容を理解できないのはもちろんのこと、人の話も理解できないことが多くなるだろう。授業中に教師が話す言葉も十分に理解できないのではないだろうか。内容の理解以前に、言葉を理解できていないのである。読解力の乏しさが深刻化しているのは、授業をしていてひしひしと感ずるという。

大学入試を設計する立場にある人たちは、その影響力の大きさを自覚し、子どもたちの知的発達を促す方向に、小中高校の教育が向かうように配慮していただきたいものである。

---

◆本コラムの著者・榎本博明氏の新刊が発売中！

教育現場は困ってる:薄っぺらな大人をつくる実学志向 (平凡社新書)

いま、教育の現場では、英会話を小学校から始めるようになったり、2022年度から、高校の国語の授業で契約書の読み方を学ばせるなど、あらゆる学習において実用性を重視する実学志向が強まっている。

だが、社会に出てほんとうに役に立つ教育には何が大切か、いま一度、立ち止まって考える必要があるのではないか。このままでは、変化の激しい時代に柔軟に生きるのは困難になるだろう。

教育界の現状や教育改革の矛盾を指摘し、学校教育の在りかたに警鐘を鳴らす。